

---

# 件の九段

明石 凧

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

件の九段

### 【Nコード】

N2503F

### 【作者名】

明石 凪

### 【あらすじ】

自称ゴーストバスター「魅斗」不思議な体質の主人公「依喪」それから、彼らが出会った『恐怖』たちの囁。

## 階段を見上げて／てげ上見を談怪

階段を見上げて／てげ上見を談怪

学校の怪談というフレーズを聞いて学校の階段と脳内変換し、一体全体階段の何が怖いんだ、こんなもの全然怖くないじゃないか、と思っていたのは僕だけじゃない筈。

そしてある日突然、自分の致命的な過ちに気付く。すなわち、そもそも階段なんて怖いわけがなく、階段だと思っていた単語は階段でなく怪談であり、怪しい話が、怖いんだ。

僕が聞いたのは、なにも、人間馬鹿だと損をする、なんていう話じゃあない。話したいことは簡単な概念で、人間は怖いかどうかを判断する能力を持っているということ。

階段は怖くないけど、怪談は怖い。そここのところの判断基準を明確にせずとも、いやむしろ、明確にしないからこそ、怪談は怖い。僕たちはそれを知っている。

恐怖は本能の一部だ。

人は恐怖を恐れる。

けれど、考えてみてくれたらわかるんじゃないだろうか。

もしもあなたが朝、学校でも会社でもどっちでも良い、むしろそこから帰って家族にでも会ったとき、もしくは同級生と街で偶然出会ったとき、そのときにもし、もしもだ、怖がられたら、どうするだろうか？

「君、すごく、怖い。」

そう言われたら、あなたは どうする。暖かい抱擁で迎えてくれる、自分の存在を許容してくれる、自分のことを知っていてくれる、自分のことを見ていてくれる、そんな存在が自分を見る目は、恐怖色に染まっていた。

それって、怖いことじゃないだろうか？

怖いということが一体どういうことを表すのかなんて全く問題じゃない。問題は、怖いということは何も一方通行とは限らないということ。

けれど勘違いはしないでほしい。そもそも、怖いやつらは、あなたは僕を怖いとは思っていない。あなたや僕がよく知っている知人を怖いと思わないのと同じで、普通は彼らも僕らを恐れない。

ならば彼らは何を恐れるのか。

恐怖には二つある。災害を恐れる恐怖と、崩壊を恐れる恐怖。つまり、何が起こるか分からない恐怖と、それが起こってしまうえば全てが失われる恐怖。自分の体や心が破壊されるかもしれない恐怖と、自分の思想や主張が破綻してしまうかもしれない恐怖。

僕たちが僕たちの破壊を恐れるように。

望んでも叶わないということを、彼らは恐れる。

あなたや僕が恐れる恐怖たちも、

本当は、

怖がられるのを、恐れている。

## 心霊写真／心写霊真 壱

### 心霊写真／心写霊真

壱

「あのう……、」

背後からの声に、僕は振り返った。そこに立っていたのは、黒髪ツインテールの小柄で可愛い女の子。廊下の真ん中にいて、申し訳なさそうな目で僕を見ている彼女は、僕の知らない子だった。

「何？ 僕、なにかしたかな？」

首を傾げて、少女に答える。

「え、あ、いえ。そういうわけじゃないんです。その、あの……」  
どうしたんだろ？

「言いたいことがあるならさっさと行ってほしいな。早く家に帰りたいんだけど？」

既に放課後。今日は花鈴に借りた『首切り女子高生とハムスターのモヘ』をプレイする予定だから、楽しみにしているのに。

「えっと、ですね、」お、意を決したらしい。覚悟を決めた人の表情をしている「その、わ、私と、屋上に行ってくださいませんか！」

……。

僕は数秒悩んだ。

「やだ。」

この女の子と屋上に行くことよりも、『首切り女子高生とハムスターのモヘ』をプレイする方が先だ。僕の脳はそういう結論を出した。

女の子は鯉が本当に滝を登ったのを見た人みたいに驚いて、そしてあたふたし始めた。

「え、ええ！？ どうしてですか！？ 私みたいな可愛い女の子が

屋上みたいな人気の無いところに行こうって誘ってるんですよ？

健全な男の子なムフフな展開を期待してOKするものじゃないが！」

そして何故か怒られた。

しかもこの女、自分で自分を可愛いって言いやがった。

たしかに可愛いけどさ。

「んー、でも別にムフフな展開がある訳じゃないでしょ。良いところで告白、普通でカツアゲ、悪くてサンドバック。おーコワ。」

「私はそんなに酷いことをしたりしません！ どちらかというところの方が好みです！ じゃなくて！」

じゃあなんだよ。

DM発言はスルーしてあげる僕だった。

「細かいことは考えずに私と屋上に来なさい！」

「はぁ……。まあ、別にいいけど」

僕は仕方なくそう言った。もう正直に言つとめんどくさかった。

僕たちは廊下を歩いた。もう時間も遅いので、人はいない。

そういえば、この子はなんでこんな時間までこんなところにいたんだろう。僕に用事があるなら、放課後になってすぐに教室を訪ねて来ればよかったのに。

「そういえば、なんで屋上に行くの？」

僕は隣を歩く少女に尋ねた。

「んー、それは、行けば分かります。」

「ふうん。まあ、良いけど。屋上で男子と二人きりになって大丈夫なわけ？ 彼氏とか、いないの？」

「セクハラで訴えますよ？」

なんでじゃい。

「まあ、でも。彼氏はいないのでその心配はないです。」

「そうなんだ？」

意外だった。容姿を考えれば、モテそうなのに。

「彼氏が出来ても、なぜか、すぐに行方知れずになっちゃうんですよ。」

……いや、普通ならないうて。どんな彼氏だよ。ヤクザか？ ヤクザなのか？

「だから、彼氏は作らないことにしたんです。というより、誰も私に寄り付かなくなっただんですけど。呪いの女、とか言われちゃって……」

少女はそう言って苦笑した。悲しそうに見えた。

屋上に向かう階段を登り切り、鉄製の重たい扉を開けた。女の子を通して、僕も屋上にでる。

夕焼けが眩しかった。

屋上には何者かのシルエットがあった。背が高く、スレンダーな美人を連想させる。ウエイトレスのように、腰に手を当てて、反対の手を掌が上を向くようにしている。

「……なにしてるんだ？ 魅斗。」

「えっと、呼んで来ましたよ、魅斗さん。」

隣の女の子がそんなことを口走った。

こいつ、魅斗のパシリだったのか……。

「ありがとう、沙織さん。私の下僕を呼んで来てくれて助かったわ。それじゃあ、もう大丈夫よ。行っても良いわ。なに、あなたの悩み事は私のその下僕が解決するから、心配いらないわ。まかせなさい。それじゃあ、またなにかあったらメールして頂戴ね。私たちからあなたに連絡することはあまりないとは思いますが、もし必要だったら何らかの方法で連絡をとるから、大丈夫よ。なにか質問はあるかしら？」

シルエットは夕日に向かったままそう言った。

こいつ、絶対、自分のことを、かっこいいとか思ってる。

……ナルシストは嫌いだ。

「いえ、特に無いです。えっと、それじゃあ、いろいろ聞いてくださってありがとうございます。失礼しますね。」

そう言って、彼女はペコリと頭を下げた。

「あ、依慈亞くん。またお話ししようね」

去り際にそんな言葉を残して、屋上から出て行つた。

「なんだ？ 依喪、もうあの子を落としたのか？」

「人をジゴロみたいに言うなよ。別に、何もしてないさ」

僕はそう言いながら、シルエットに近づく。

「大体、僕を呼ぶならメールでもすれば良いだろ。」

そこで僕はハツとする。

なんと、そいつはハリボテだった。

「……。」

愕然としてしまった。

「ハツハツハ！ 驚いたかい、依喪！」

屋上のドアが開いて、魅斗が現れた。

黒くて長い髪を、ポニーテールに纏めている。まさしく尻尾のように見えるその髪は、彼女の腰に届いていて、獣の様な眼光と相まって、彼女の存在を誇示している。

僕の後ろにいたらしい。

隣にあるハリボテを見ると、スピーカーが付いていた。ここから声を出していたのか。手の込んだことをしやがる。

「……それで？ 何の用？」

「ああ、うん。用事つてのは簡単だな。うん、そうだな、何から話そうか……。」

「ハリボテ作る暇はあったんだよね？ だったら、説明の手順くらい考えておいてほしいもんだね」

「お前相手に説明の手順を考える時間なんて無駄だと思ったからさ。どうせお前は私が何かを考えている間中、注ケンは遅行よろしく待ち続けるに決まっているからな。」

ケンって誰だよ。というか、それを言うなら忠犬八チ公だ。

アッシュとダブルヴェを間違えるな。

「まあ、別に良いけどね。」

僕は屋上の手すりに寄りかかった。魅斗は腕を組んで、悩んでいる。

「ああ、そうだ。うん、依喪、あの女の子の名前は帚木沙織というのだけれど、彼女のことをどう思った？」

どう思ったって言われても。

「そうだね……、儂い印象の女の子だと思ったかな。なんだか、孤独、それ以上に、人と違う場所にいるように思える。」

「それだけ？」

「それだけだよ。まだ会ってすぐだしね。」

僕がそう言うと、魅斗は首を傾げた。

「彼女と同じクラスじゃないのかい？」

「ああ、」そうか、クラスメイトだったのか。だから、初対面ほどには警戒してなかったんだ。「うん、そうらしいね。言われるまでわからなかった。僕はクラスメイトの顔や名前は記録してないからよくわからないんだよ。」

「どうして記録しておかないんだい？ 困らないのかい？」

「別に困らない。もともと、一緒にいて得をする連中じゃないしね」  
ふうん、と、魅斗は頷いた。

「それじゃあ、それはそれで良いでしょう。ところで、あの女の子が私の所に来た理由は推測できるかな？」

魅斗を訪ねる理由。

それは、つまり、なにか『おかしな話』に遭ってしまったということ。

「なにか、変な体験でもしたのか？ あの、沙織ちゃんだっけ。」

僕がそう言うと、魅斗はニヤリと笑った。

「そうらしい。どうやらね、彼女を写真に撮ると、心霊写真になってしまうことがあると言った。これについてはどう思う？」

「んー。心霊写真って、つまりそれは、ただの変な写真だろ？ いつも同じカメラを使ってるなら、レンズに汚れが付いてるかなんかだと思っけど。それが、パソコンで写真を加工してるとか。どのみち、信憑性は薄いな。沙織ちゃん、なんかに呪われてるみたいないき気じゃなかったし。変な話は聞いたけど。」

恋人が行方不明になる、だっけか。

まあ、恋人って言っても、二、三人程度だろうし、その程度だったら、偶然で済ませられるだろう。別に、怪異じゃない。

「そう、心霊写真じゃない。私も最初はそう思ったさ。けれど、これを見てくれ。」

魅斗はそう言って、四角いものをこっちに投げて寄越した。僕はそれを受け取る。

それは、輪ゴムで束ねられた数枚の写真と、手帳だった。僕は輪ゴムを外し、写真を順番に見ていく。

一枚目は、沙織ちゃんと僕の知らない女の子が一緒に写っている写真。たしかに、沙織ちゃんの腕が見えないし、腕だらけの幽霊が背後に写っている。ピクニクか何かだろうか、お洒落をしているというよりは、動きやすい服装といった感じた。場所も、どこかの公園のようだし、幽霊の手じゃあない手も見えるし、周りに人がいるんだろう。

二枚目は、男性と二人で映っている。おそらく彼氏だろう。今はないって言うてたから、元彼氏、か。水族館みたいな場所だ。記念撮影ができるパネルの前に立って映っている。回りには通行人が見える。沙織ちゃんの足元に、苦しそうな顔をしている幽霊が四、五匹、映っている。水が多い場所だから、多く写ったんだろう。

三枚目は、これは……、一年生の時に学校行事で行ったキャンプの時の写真だ。沙織ちゃんと、他にも何人かの女の子が移っている。そして、その部屋の壁に掛けてある絵の中に幽霊が写り込んでいた。恨めしそうに彼女たちを見ている。そういえば、心霊写真があるって噂になってたっけ？

「……えっと、本物ですね。」

その判断は感覚だ。それから、経験。僕はこれでも人間じゃないので、それくらいはちゃんとわかる。

「そうなんだよ。だから、困ってる。」

やれやれ、といった風に魅斗はため息をついた。

「まったく、しかもだ、見てくれればわかると思うけれど、どれも別の幽霊なんだよ。つまりおそらく、彼女は、幽霊吸着体質ということだ。」

「……。それって、本物がいたんだね。彼女自身に靈感はあるの？」  
「いや、無い。皆無だ。こんな写真が撮れることに心当たりはあるかと聞いてみたのだけれど、無いらしい。見えたり、聞こえたりもしないそうだ。つまり、完全に、幽霊を呼ぶ『だけ』の体質なんだ。」

幽霊吸着体質。幽霊が現れなくなるような性質でも持っているんだろうか？ 原因がよくわからない。

僕はもう一度、三枚の写真を見比べてみた。どの幽霊も、苦しそうな表情をしている。いや、一枚目の手だらけの奴は表情がわからないんだけどさ。

「……でも、こういう風に写真を撮ってるってことは、毎回幽霊が写り込む訳じゃないよね？」

「うん？ どういう意味だ？」

魅斗は首を傾げた。

「んー、毎回幽霊が写るなら、単純に写真が嫌いになるんじゃないかと思うて。でも、これを見れば、普通に写真を撮ってる。特に『撮影を怯えている様子』が感じられない。つまり、必ず幽霊が写り込むって訳じゃないってことになる。実際、学校行事の写真で彼女が普通に写ってるのを見たことがあるしね。」

まあ、そもそも幽霊なんてそんなにたくさんいるもんじゃないんだけど。それを差し引いても、必ず写るとは限らないってことは、別に憑かれている訳でもないんだろうし。

憑かれていたら、必ず毎回、同じ幽霊が写り込む。けれど、そうじゃないということは、強すぎる吸着体質ではないということじゃないんだろうか。

それに、彼女自身からは幽霊に好かれるような気配は感じなかった。

「ふむ、なるほどな。確かにその通りだ。」

気付いてなかったのか。僕は思わず脱力した。

「ゴーストバスターならそれくらい思いつけよ……。魅斗、一応本物なんだよね？」

「アハハ！ 細かいことを気にするな！ 禿げるぞ！」

それはいやだな。

「まあ、どちらにせよ依喪に相談したのは早くも正解だったという訳だな。まあ、とりあえず、だ。今回の彼女の頼みごとは、この心靈写真をどうにかしてほしいうものだ。」

うわー。メンドクサ。

「もう写らないようにってこと？ んー、そもそもそれって体質なんでしょ？ どうかしろもくそもないんじゃないの？」

「そうかもしれない。でも、調べてみる価値はあるさ。もしかしたら、彼女に何かが憑いていて、その霊の仕業かもしれないな。」

……いやな言葉を聞いたな。

「その、一応確認しておくんですけど。依頼を受けたのは魅斗だよな？」

「いや、違う。私とその奴隷だ。」

奴隷って誰だ。

「僕を巻き込まないでくれ。」

「その件については、すでに時遅し、と答えるしかないよ。まことに残念がらね。」

この野郎。

本気で殴ってやろうか。

「ってことは、どうせ今回も俺が動くんだよね……。まったく、江本さんになった気分だよ……。」

「江本？ 誰だそれは？」

「ん？ ああ、大学生の知り合いだよ。変な力を持つてる人。なんか、怖いものが見えるんだってさ。高校の時、トラブルシューターをやってたらしいよ。」

「怖いものが見える、か。なかなか面白い力だな。まあ、私にも似たようなものがあるのだけれどね。」

無い胸を張ってそう言う魅斗。なんだか説得力が無いのだけれど。「まあ、その能力とやらは置いといて。結局、どうすればいいの？調べるつたって、方法が無い。」

「うん、そこでだ。こいつを貸してやろう。」

そう言っ、魅斗は鉛筆くらいの細長い筒が七個束になった物を、ポケットから取り出した。

なんだそれ。

「ほら、生モノだから気をつけて扱え。」

そう言っ、筒の束をこちらに投げて寄越す魅斗。知るかよそんなもん。

受け取っ、見てみる。七個の筒は六角形になるように配置されていて、真ん中の筒の両端には、丸くて透明な石がはめ込まれている。中を覗いてみたら、変な文様が見えた。

……。文様が光ってやがった。僕はとっさに眼を離す。

「これ、なんて名前のアヤシイアイテム？」

「名前はまだない。私の自作だからな。」

めちやくちゃあぶねえ。

「周りの六つの筒に蓋がしてあるだろう？」

言われて、僕は手元のアヤシイアイテムに目を落とした。若干引き気味に。

「その筒は開くようになっていて、中には管狐が入っている。」

妖怪じゃねえか。

いや、管狐は妖怪じゃないっけ？ 使い魔？

……。問題はそこじゃなかった。

「小さいものだけれどな。この間の火事で依喪に妖怪を扱う能力があるらしいことがわかったから、その子たちとも相性が良いだろう。」

「相性なんて良くなって良い。あれ、良くなって良いって否定なの

か肯定なのか判んないね。新発見だわーい。

いかん、脳内テンションがおかしい。こういうのってテンパってるって言うんだよね。

「じゃあ、この真ん中のアヤシイ文様は何だ？　なんか光ってるんだが。」

「ああ、それは管狐を生み出すための呪だ。」

「そんなもんあるのかよ！」

「うん。言霊ってそういうものだし。もともと、管狐は自然発生するから、それを促す作用があるだけなんだが。そこで、生み出された管狐はその管に空気があればそこに入るのさ。周囲にいる管狐を捕まえることもできる。んで、ほら、周りの石を見てみな。」

石？　あ、確かに。

回りにある細長い管に、中心から向かって外側になるように向けて石が埋め込まれている。ひとつだけ白く、薄く光っていて、あとは暗い。

「なんだこれ？　窓かなんかか？」

「それは、中に入ってる管狐の感情や霊力を表してる。霊力は自然と回復するが、感情が自然と回復するかどうかはわからんな。感情だし。捕まえた管狐だと、怒ってるかもしれないし、天狗の使いだと、天狗がやつてくるかもしれない。まあ、気をつけることだ。」

んー、天狗には勝てないかな。

「まあ、がんばってみるよ。」

僕はそう言っただけ息をついた。

魅斗はさっさと屋上を出ていく。

振り返ると、夕焼けはどこかに去っていた。

夕焼け。この夕焼けは、毎日訪れるのに、この夕焼けを見る僕は、どうしてこの瞬間にしかないんだろうか。

毎日が、平穏で平和な毎日が、延々と繰り返されることは、そんなに退屈だろうか？

僕は、写真を見た。

写真を撮る人の気持ちが、少しくらいわかる気がする。そして、きっと、沙織ちゃんにもわかるんだろう。沙織ちゃんには、わかっているんだろう。

だから、写真を撮るんだ。

何かを残したい人がいて、その想いを台無しにしたくはないから。そうだとしたら、それはちよつと、僕に似ている。

怖くても写真を撮りたい。たまに撮れてしまう心靈写真を無くしたい。安心して写真に写りたい。

そういうことなんだろう。

## 心霊写真／心写霊真 式

### 心霊写真／心写霊真

#### 式

僕は家に帰って、写真を調べていた。タイルカーペットにホワイ  
トのデスク。いくつかのコンピュータ。今走らせているのはMac  
だ。ブラックのボディのMacBook。写真をスキャナで取り込  
んだ。それを三つならべて、見比べている。

魅斗に預かった写真を調べていてわかったことがある。それは、  
写り込んでいる幽霊がどれも間違えなく別のものであるということ。  
さらに、それら幽霊に一切共通点が無いということ。おそらく、浮  
遊霊を捕まえていることになる。

幽霊を引き寄せても、幽霊に憑かれていない。不思議といえば不  
思議だ。いや、これはむしろ変だ。

幽霊は基本的に孤独だから、理解者を求める。

生きていた時から、孤独だった。

だから、誰かに自分をわかってほしくて。

その想いが強すぎて。

消え去らない幽霊になっていく。

そんな幽霊が、自分の存在に反応する彼女の体質に気づいて尚、  
彼女に憑かないというのは、不思議だ。

「んー、沙織ちゃんの上に、霊能者でもいるのかな。それか、土地  
神か、なんか強い幽霊か。」

あまり想像できないけど、そうでもないと言明がつかないのも事  
実……。

たとえば、この写真が撮れた直後は幽霊に憑かれていたんだと仮  
定しよう。これは自然なことだ。

沙織ちゃんの肉親の誰かが霊能者、それも、簡単な幽霊であれば徐霊できる程度の能力を持っているとする。そうすると、沙織ちゃんに気付かれないように徐霊し続けていたんだと考えれば、毎回写真に幽霊が写らない　つまり、沙織ちゃんが憑かれていない理由が説明できる。

もしくは、沙織ちゃんの家に土地神や、ほかの強力な思念体があれば、それらの力に浮遊霊が耐えられなかったということも考えられる。人間でも、強いプレッシャーに耐えられないように、思念体である幽霊も同じものだ。

けれど、どうも違う気がする。

「うーん、なんというか、沙織ちゃん、なにかまだ秘密にしているところがあるんじゃないかな……。」

この予想は多分正解だと思う。

一度憑いた幽霊はその日一日、少なくとも家に帰るまでは離れないということになる。見せてもらった心靈写真のうち一枚は、学校行事でキャンプに行ったときのものだ。あまり記憶していないけど、沙織ちゃんが写った『普通の写真』は他にもあったはず。

それに、最後にみんなで撮った集合写真には、幽霊が写り込んでいなかったように思う。集合写真は、クラス全員に配られた。

僕も持っていた。捨てたけど。

クラスメイトが騒いで無かったから、やっぱり心靈写真ではなかったんじゃないかと思う。

カタ、

管狐の筒が揺れた。狐はいつの間にか二匹に増えていて、僕は少し驚いた。どこから捕まって来たんだろうか。

僕は筒を持ち、二匹を外に出してやった。

スルリ、

二匹の狐は筒の外に出て、僕の前に浮かんだ。主従契約を結んだ訳でもないのに、律儀なんだな、と思う。

「お前たち、言葉は使えるのか？」

僕がそう言うのと、二匹の狐はよくわからない鳴き声を上げるだけで、答えなかった。

言葉は使えないのか。

どうやって意思疎通するんだよ。

「まあいいや。ほら、お前、もう戻っていいよ。」

片方の狐に目を向けてそう言うのと、どうやらこちらの言葉は解るようで、素直に管に戻っていった。

「よし。」僕は狐の筒を持ち、残った一匹に視線を向けた。「ちょっと散歩にでも行くか。」

僕はMacBookを閉じた。

狐は素直に僕に着いてきた。いや、憑いてきたと表現した方が正しいのかもしれないけれど、それはまあ、細かい話だ。

外に出ようと思った理由は簡単で、この狐を連れていたらどうなるのかを実験してみたかっただけだ。それから、この狐との意思疎通を図らないといけない。

僕と狐は部屋を出た。階段を十三段下りて、それから玄関を出る。四車線の道路の上を横断している橋を渡り、それから、小さな公園に入った。僕の家の前はかなりうるさい。自動車なんてなくなればいいのにな。

錆びついて揺らすと軋んだ音を立てるブランコ。塗装が剥げて可笑しな色をしているすべり台。腐りかけた木で組まれたベンチ。雨にさらされて硬くなった地面。風に吹かれ続けて大きな砂粒しかのこっていない砂場。螺子が取れて棒が回転するようになった鉄棒。

まるでこの場所がガラクタになってしまったみたいだな、そんな風景。

ずっと昔は、僕もここで、普通の子供と同じように遊んでいたのに。その思い出はもう、ここには残っていない。

「写真でも撮ってたなら、その思い出も残ってたのかな。」  
けれど。

けれど、その写真すら、この公園のように色褪せていくものなの

に、どうして、写真を残すことに意味があるんだろうか。

写真を残したところで、色褪せた昔を見たところで、それがただの色褪せた昔である以上、この公園をもう一度見に来ることに、写真を見返すこととは、何も変わらないと思うのは僕だけだろうか。

きつと僕だけだろう。

そんな冷めた感触で、世界に触れているのは。

狐が僕に寄り添った。意外なことに、こいつは温かった。

僕はブランコに座った。公園の固い地面。その向こう側は、もっと硬いコンクリートだ。フェンスの向こうに細い道と、その向こうには小さなビル。ぐちゃぐちゃに灰色な町の、茶色く錆びた一角。どうしようか。写真はおそらく、というより何度も確認したけど、間違えなく本物の幽霊だ。

だとしたら、写り込んでいた幽霊たちが今どうしているのかを調べるくらいしか、やることが思い浮かばない。調べること自体は樹裕にでも頼めばいいんだけど、そうすると、僕が暇だ。

いや、暇でも良いんだけどさ。頼まれた以上、なにかしたいし。

……そうだ、水族館。

あの三枚のうち、一枚は水族館だ。そこで映った霊は数が多かった。水周りだから霊が集まったんだろうと思ったけれど、果たして本当にそうなのか。

つまり、あの幽霊は本当にあの場所に居た幽霊なんだろうか。

一度足を運ぶ価値はあるかもしれない。

……ん？

僕は一つ気付いた。というより、どうして今までそれに気付かなかったのか、それが不思議でたまらない。

「魅斗は管狐を捜査に使って言ったけど、管狐をどうやって使うんだ？」

というより、こいつ、何ができるんだ？ 誰かを病気にさせれるんだっけ？

……使えねえ。

## 心霊写真／心写霊真 参

### 心霊写真／心写霊真

参

翌日は朝から雨だった。憂鬱な気持ちになりながら、体を起こす。それから制服に着替えて、階段を十三段、降りた。玄関の前を通って洗面所に向かう。顔を洗って、歯を磨いた。

リビングに行くと、母さんが食事の用意を済ませてくれていた。僕はテーブルについて、手を合わせてからそれを食べる。書き置きがあった。

『虫食い穴』

……？

いや、母さん。流石に、意味がよくわからないよ。何のこと？

僕は母さんの書き置きを無視して、朝食を食べ終えた。一旦部屋にもどり、カバンに教科書と管狐を放り入れる。

学校への道は退屈だ。コンクリートばかりで。植物が無い。たまに幽霊がいるけど、そいつらも僕には鬱陶しい。

それに、今日は写真のことを調べないといけない。写真が、あの写真は僕も魅斗も心霊写真だと思ったけれど、ソフトウェアで解析してみないことにはわからない。それに、自分で描いた合成写真に呪いを施した可能性もある。

教室にはいると、沙織ちゃんと目があった。

「あ、依慈亞くん！」

明るい笑顔で僕を呼ぶ沙織ちゃんに、おもわずキョドった。名前を呼ばれるのには慣れてない。

「お、おはよう。」

ぎくしゃくしてないかな、とか思いながら挨拶を返す。沙織ちゃ

んは僕のところまで来た。

「写真のこと、なにかわかりましたか？」

「うん、少しね。まだ何とも言えないけど。……あ、そうだ。沙織ちゃん、借りてる写真、水族館で撮ったヤツがあつたよね？」

「え、んー、はい。確か。それがどうかしましたか？」

僕は自分の席に鞆を置く。沙織ちゃんも後を付いてくる。僕は席に着いた。

「いや、ちょっと調べに行こうと思って。あの水族館、どこにあるの？」

「えっと、確か、駅で三つくらい行ったところに。今度案内しましょうか？」

ふむ、どうしようか。沙織ちゃんみたいな可愛い子とデートできるなら文句はないけれど、彼氏でもない僕が沙織ちゃんを連れ回すつてのは、なんか気が引ける。いや、本当は全然気が引けないんだけど。

「うん、そうしてくれると嬉しいな。」

僕は沙織ちゃんにそう言った。

チャイムが鳴ったので、沙織ちゃんはそれじゃあと言って席に戻った。クラスメイト達も、ガタガタとうるさい音を立てながら席に座って行く。

担任が入ってきた。HRはすぐに終わった。一時間目は数学。暇だ。

そう思つて、うつ伏せた。眠る。

夢は見なかった。

夢なんて見たことが無い。僕は人間じゃないんだし。夢を見るほど若者でもない。いや、割と若者なだけださ。

目を覚ました。時計を見ると、昼休みだった。雨は上がっていた。一時間目は9時に始まって、今がちょうど1時。だいたい4時間。これで合計6時間睡眠だった。人間の最低睡眠時間はこれくらいだったと言われていたような気がする。脳医学者じゃないので本当の

ところはわからないけれど。しかし、睡眠っていう行為そのものが霊的な意味を持っている以上は、必ずしも医学だけが重要ではない。まあ、そんな講釈は置いておこう。

僕はノロノロと立ち上がる。鞆の中から財布を取り出して、教室を出た。

見たことの無い顔ばかりだ。そもそも、僕が覚えている生徒なんて、魅斗と沙織ちゃん、それから琴音くらいのもんだ。琴音は僕の幼馴染。

高校の外の知り合いはもう少しいるけど。

人外まで含めるともつというな。

購買で焼きそばパンを買った。本当はカスタードパンが食べたい気分だったけど、売れ残りが焼きそばパンしかなかった。時計をもう一度ちゃんとみると、昼休みも半ば。なるほど、寝過ごしたらしい。つまり、カスタードパンは全て売れてしまったということ。

仕方無く買った焼きそばパンを手に、僕は教室に戻ろうと、歩き出した。

途中、女子生徒が裏庭で写真を撮っているのを見つけた。

写真部？　それか、写真が趣味か。どちらかかもしれない。写真部がこの学校にあるのかどうか、僕は知らないけれど、持っているカメラがこれらのデジカメではなかった。プロのカメラマンが使っているようなタイプのもの。やっぱり僕はカメラに詳しいわけじゃないので、その女子生徒が持っているカメラがそういった本格的なものなのかどうかはわからないけれど。

使えるかもしれない。

そう思った。僕は歩く方向を変えた。購買の隣の裏口を通って外に出ると、校舎に沿って歩き、角で右に曲がった。そこが裏庭。

女子生徒はまだ写真を撮っていた。何を取っているのかは不明。木の枝にカメラを向けているように見える。まっすぐに下ろした髪は、型の辺りまで伸びていて、茶色に染められている。明るいブラウン。

「こんにちは。」

僕は彼女に話しかけた。

すると、彼女はビクリを肩を強張らせて、こちらを振り向いた。  
「誰？ 足音を立てないで女の子に近づくなんて、さてはあなた、変質者ね！」

「違う！ それは盛大なる誤解だ！」  
思わず叫んだ。

「ん？ なんだ、違ったの。」

「初対面を変質者よばわりするなよ！」

「足音を立てないあなたが悪いのよ。」

断言されてしまった。いや、まあ、足音が無かったのは、うん。  
無意識なんだけどさ。

「まあいいわ。」

彼女は構えていたカメラを下ろして、体をこちらに向けた。  
近付いてきて、じろじろと僕を眺めまわす。僕はなぜだか抵抗で  
きなかった。

完全に彼女のペース。

「何見てんの？」

「いや、写真のモデルに使えるかと思って」

こいつ、パパラッチじゃない。本物の写真家だ。

「……いや、僕は撮らない方がいいよ？」

「なんで？」

「病気でね。写真に写らないんだ。」

そう言つと、彼女はあからさまに胡散臭そうな表情になる。何い  
つてんのこいつ頭大丈夫？ って聞こえてきそうだった。

「まあ、それもどうでもいいわ。どうせモデルになりそうにないし。」

「

さらりと失礼なことを言う彼女だった。

「それで、私に何か用事？」

「うん、そう」

んー、何から話そうか。

心霊写真のこととか、言っても信じそうにないし。普通のひとに話すとかなり変人扱いされそうな話ではある。

まあいいや。作り話のほうが目倒だし。

「実は今、心霊写真について調べてるんだけど。帚木沙織さん、知ってる？」

尋ねると彼女は首を振った。

「知らないわ。その子がどうかしたの？」

「その子を写真に撮ると、心霊写真が写るらしいんだよ。毎回じゃないんだけど、少なくとも頻度で。」

「……心霊写真って言われても、私は写真解析の専門家じゃないわよ？ ただの写真好きな女子高生。写真の解析はお断りだわ。それに、心霊写真なんて信じられないし。」

まあ、普通は信じられないよな。心霊写真のことなんて、その存在を確信している僕でさえ、それが大抵の場合はまがいものであることには賛同しているくらいだし。

「まあ、そこは置いて置いてくれ。それになにも、心霊写真の解析を頼もうと思ってるわけじゃない。……去年のキャンプの時、君はそのカメラで写真を撮ったんじゃないか？」

「ええ、撮ったわね。友達がほとんどだけど、みんなが歩いている風景とか、いろいろ。……まさかあなた、私が撮った写真から心霊写真を探そうって言うの？」

「そのまさかだよ。」

写真家の少女は呆れた表情になる。

「そんな写真があったら私が気付くに決まってるでしょう。わざわざあなたに写真を見せたりしないわ」

「そうかもしれないね。でも、君はさっき自分で言った通り、写真解析の専門家じゃない。」

彼女はそこで言葉につまる。

「確かに君は君自身が撮影した写真全てを記憶しているだろう。す

べてを思い浮かべることができるだろうね。それは間違えないと思う。君の写真に対する思い入れは、初対面の僕にでも窺い知れる。

けれど、君は写真解析の専門家じゃない。君の撮影した写真全てが心霊写真で無いとは、断言できないんじゃないかな？」

「それは……確かに。そうね。でも、あなたはどんなのよ？ 写真解析の専門家だ、とも言うの？」

「いいや、違う」

僕は断言する。

「だったら、あなたが私に声をかけた理由がわからないわ。写真が目当てじゃないんでしょう？」

「それも違う。僕が君に声をかけたのは、君の写真を見せて欲しいからだ。できれば、学校専属のカメラマンが撮影した写真も調べたいけれど、それは後回し。まず、君の撮影した写真すべてを調べて心霊写真を選びだす。それが、ヒントになると思うんだ。」

「ヒント……？」

「そう、ヒント。帚木沙織を撮影した時に頻繁に心霊写真が写る原因を探るヒントだ。」

「……ちよつと待って、なんだかおかしくない？」

彼女は眉間に皺を寄せた。

「あなたの話を聞いてると、まるで、心霊写真がたくさんあるとも思ってるように感じるわ。でも、心霊写真なんて撮れる方が珍しいじゃない。」

そのとおりではあるけれど、本当は違う。

心霊写真はどこにでもある。ただ、普通の視力で見てもわかるほどに幽霊が鮮明に映った心霊写真が少ないだけだ。

「それは、少し説明が面倒なんだよね。」

説明は簡単なだけけれど、わかってもらうのが面倒だ。

「とにかく、君が撮影した写真を見せてくれないかな？」

「見せてくれなものにも、いくらでも見せるわよ。部室に行けば、他の人が撮った写真もあるし。」

「……部屋？」

「そうよ。」

彼女は胸を張って言った。

「私は宇都宮茉莉。写真部よ。」

やっぱり写真部ってあったんだね。

## 心霊写真／心写霊真 肆

### 心霊写真／心写霊真

#### 肆

この高校の写真部は名門らしい。その自慢話を、放課後になって写真部の部室に案内される間、ずっと聞かされていた。わけのわからない調査のためとはいえ、そう言った話を聞いてくれるのがうれしいらしい。宇都宮さんは（この少女を下の名前で呼ぶのはなんだか抵抗がある。）楽しそうにそれらを話していた。

去年写真部に在籍していた先輩が、かなりすご腕だったらしい。プロのカメラマンとして将来活躍するだろうと言われていたとか。

その先輩がどれほどすごかったか、ということを知られた。

写真部の部室に着いた。彼女はポケットから取り出した鍵で、部室のドアを開けた。部室は、写真部専用割り当てられているみたいだ。部活棟の二階にあった。

「鍵、君が持つてるの？」

「そうよ。だって、私が部長だもの。」

宇都宮さんは二年生だから、三年生はいないということかもしれない。三年生を差し置いて二年生が部長を務めると言うこともあるけれど。

「とにかく入って。」

先に部室に入って行った宇都宮さんに促される。僕は埃っぽい部屋に足を踏み入れた。

パチ、と言う音がして、電気が付く。中は割と整頓されていた。真ん中に長机が二つと、パイプ椅子が全部で五つ。奥は窓だけれど、カーテンが閉められていた。入口から向かって右側には棚があり、ファイルが収められている。

宇都宮さんはパイプ椅子を一つ引いた。座れという意味だろう。僕はそこに座る。

彼女は棚から一冊のファイルを選んで、僕の前に置いた。

「これ、私が撮った写真。あなたが見たがつて、去年のキャンプの時のものよ。心霊写真は写ってないと思うけど。」

「そうかもしれない。とにかく、調べてみるよ。」

ファイルと思ったそれは、アルバムだった。プラスチックのカバーだから、見分けがつかなかった。

パラパラとページを捲って行く。宇都宮さんに見せてもらってるんだから、あんまりじっくり調べるわけにもいかないかと思った。

ざっと読み終わった。

「キャンプの分はこれだけ？」

「ん？ ええ、そうよ。他の行事の分も見ろ？」

どうしようか。見た方が参考にはなるけど、もう大体分かった。

というより、むしろわからないことが増えたんだけど。

「んー、いや、もう大丈夫だよ。写り込んでるものも大体分かったし。調べたいことは調べれた。」

「ほんとに？ 眺めてただけじゃない。」

「眺めてただけだけど、眺めればわかることもあるのさ。」

さて、これからどうしようかな。僕はとりあえずファイルを閉じた。表紙には『H十九年 一年キャンプ』と手書きで書かれていた。写真を眺めていてわかったことは二つ。

心霊写真の発生にバラつきがあること。それから、数回だけ帚木沙織が写っていた写真があり、それらは誰が見ても分かるような心霊写真じゃなかったこと。

これから分かることは二つ。ひとつはキャンプ場が霊的な要素を持っていたかもしれないということ。もう一つは、帚木沙織を撮影すれば必ず心霊写真になるわけではない、ということ。

前者の結論はどうでも良い。しかし、帚木沙織の写真が全て心霊写真ではないということは、かなり重要だ。

彼女に引かれた幽霊たちは、何らかの理由で彼女に憑けずにいるということ。

幽霊吸着体質は、本質的には幽霊に対して何らかの反応をする体質か、幽霊に対して何らかの影響を与える体質のことを指す。

誰にも反応してもらえない幽霊たちは、自分と接点を持つ存在に必ず引かれる。そして、その存在の傍にしようとする。

恋人に依存するようなものだ。

つまり、こんな風に霊が纏わり付いて離れない状態を、霊に憑かれたと形容するわけだ。

帚木沙織が幽霊に憑かれていないということは、帚木沙織は幽霊吸着体質ではないということになる。それなのに、彼女を撮影するとその写真が心靈写真になる頻度がかなり高い。一生心靈写真らしい心靈写真を撮影しない人間が存在することを考えると、間違えなく恐ろしく高い確率だ。

何か原因がある。

「……あの、依喪くん？」

気まずそうに話しかけてきた宇都宮さん。そうだ、ここ、写真部の部室だった。

「ん？ ああ、ごめん。邪魔だったね。すぐ出てくよ。」

僕はそう言つて、席を立とうとする。

「違う。別に邪魔なんて言っていないでしょ。そうじゃなくて、写真の感想が聞きたいの」

「ああ、なるほど。」

そうか、彼女はそういう種類の人間だった。

何と言ったものか。ここでまたファイルを開けば、それは写真をよく見てませんでした、と言っているようなものだ。けれど、事実良く見ていない。適当な答えだと、嫌な気分させるかもしれない。「写真そのものは、よくわからないな。でも、よく撮れたと思うよ。写ってる人がみんな楽しそうだ。楽しかったんだろうけど、そういう意味じゃなくて、楽しそうに写真に写ってる。」

当たり障りがない程度に、正直な感想を言った。

「素敵な写真だと思うよ。」

「ほ、本当？」

「本当。僕は写真評論家じゃないから、詳しいことは言えないけどね。良い写真だと思う。」

宇都宮さんは本当につれしそうに笑った。ファイルを棚に戻す。

「私ね」彼女は僕に背を向けたまま言った。「写真って好きなの。」

……いや、知ってる。

彼女が何を言いたいのか僕にはわからない。

振り返って、僕の正面に座る。手には別のファイル……というよりも、小さなアルバムのようなものがあつた。

僕にそれを差し出す。

受け取って、中を開いた。一つの頁に、二つの写真が入っている。パラパラとめくる。どれも、風景や小物を写した写真だった。人は、映ったとしても体の一部や、影。けれど、どれも生活感にあふれた写真だった。

何だろう。

そこにきちんと人が生きている。それが、写真になっている。どうやったらこんな写真が撮れるのか、不思議なくらいだ。

人を写さずに人を映す、とも言えはいいのだろうか。

「この写真は、宇都宮さんが撮ったの？」

僕は写真から目を離さずに尋ねた。めくればめくるほど、少しずつ感動できる。

「違うわ。去年卒業した先輩の。」

ああ、なるほど。僕は納得した。

「その写真は直接公開したものじゃないんだけどね。その人はそんな写真が好きだったのよ。」

「……………」

唐突に始まった独白のような言葉に、僕は何も言わなかった。

「私もそのひとみたいに、自分で好きだって言えるような写真を撮

りたいと思ってる。」

好きな絵を描きたい。

好きな音楽を奏でたい。

好きな詩歌を歌いたい。

好きな小説を書きたい。

好きな学問を学びたい。

好きなプログラムを組み上げたい。

好きに作りたい、それができないことの、何という苦しさ。

「でも、私には今のところ、撮りたい写真なんて全く無いのよ。撮りたいと思う瞬間が全くない。」

「……写真、好きなのに？」

「好きよ。好きだけど、好きなのは写真なの。きっと私は、不純なのよ。写真を撮ることが好きだけど、撮りたいものがあるから写真を取っているんじゃないわ。」

手段が目的になってしまつて、元の目的が紛失する。記録するという目的のために写真を撮るといふ手段を用いるのが、自然だけれど、写真を撮ること自体が目的になっている。

でも、それが芸術だろう？

それは、表現の形だろう？

「私には撮りたいものがわからない。」

色の無い絵画。

旋律の無い音楽。

言葉の無い詩歌。

文脈の無い小説。

目的の無い学問。

解決すべき問題の無いプログラム。

「写したいものがなければ、やめるのかい？ とりたいものが見つ

からなければ、写真を撮らないのかい？」

「……いいえ、そう言うわけじゃないわ。」

彼女はそう言つて笑つた。

「ただ聞いてほしかっただけよ。ここ、今、私一人だから。」

三年生どころじゃなかった。二年生も一年生も、全くいないのか。まさか彼女一人だとは思わなかった。

でも、だからって。

寂しそうな顔をしないでくれよ。

「でも、良いじゃん。宇都宮さん、写真、好きなんだろう？ だって、好きなことを好きにすれば良い。」

「うん、そうね。今も好きにしてる。好きに写真を撮って、好きに現像して、好きに楽しんで、また好きに写真を撮ってる。でも、一度も、私の写真に満足したことがないのよ。それが残念。」

「……満足、って言うけれど、そもそも、自分の作品に満足できる作家なんてそうそういないと思うよ？ 自分の作品を最高傑作だっけ言う小説家は、どう考えてもただの馬鹿だ。求め続けるから、もつともつといいものを作ろうとするんじゃないかな？」

「求め続けるから……」

「そう。満たされないから求め続ける。天才ってのは孤独なんだよ。」

「

天才だけが孤独だとは限らないけれど。

けれど少なくとも僕は、天才をそういった概念だと定義する。自分の中の欲求を一つの方向にだけ向けることができる愚直さは、持つていなければならぬ。

「天才には二種類の意味がある。ひとつは絶対に他人にはまねできないような卓越した能力を持つている存在。もう一つは、絶対に他人が妥協するような事に妥協しない存在。前者はどこにでもいるけれど、後者はなかなかいない。」

「……ずいぶんと断言的なセリフね。」

彼女はむしろ呆れていた。良かった。寂しそうな表情はしてほしくない。苦手だから。

「事実だからね。まあ、でも、この写真を撮った人が、君の尊敬する先輩がどんな人なのかは知らないけれど、写真は能力じゃなくて

感性とこだわりだろう？　だったらおそらく、彼は後者の天才だったはずだ。つまり、はじめからの天才じゃない、努力して成った天才。」

まあ、本当はその先輩のことなんて、全く何一つ知らないんだけれども。

「だから、宇都宮さんも、写真にこだわり続けるなら、いつか良いものが撮れるよ。君が納得できなくても、僕が素敵だと思うような作品が撮れる。今でも十分素敵な写真だと思うしね。」

「うん。ありがとう。」

宇都宮さんは笑った。

「どういたしまして。」

僕はおどけて両手を広げた。それから、アルバムを返す。部室を出ると、彼女も付いてきた。

「もう帰るの？」

「うん、そう。ほとんど倉庫みたいに使ってるからね。ここに居ても仕方ないのよ。」

なるほど。道理で埃っぽい空気がしたわけだ。

鞆を取りに校舎に戻った。宇都宮さんは隣のクラスだった。学校指定の通学鞆と、カメラが入ってるのか、大きめの別の鞆を持って出てきた。

「一緒に帰ってもいい？」

「別に良いけど、家どこ？」

宇都宮さんが告げた地名は、僕の家近くだった。学校から歩いていける距離。

僕たちは結局、二人で一緒に帰った。

「あなた、なんで心靈写真のことなんて調べてるのよ？」

「ん？　いや、頼まれごとだね。僕が頼まれたわけじゃないんだけど、巻き込まれちゃったんだよ。」

宇都宮さんは首を傾げる。しかし、すぐに切り替えた。

「誰に頼まれたの？」

「帚木沙織さん。心靈写真が少なくない頻度で写る女の子。これは昼休みに話したよね？」

「そういえば言ってたかも。でも、その写真、本物なの？ その子が加工してそう見せかけてるんじゃないかって？」

「それは無いよ。というより、今のところ本物だと思ってる。その辺の調査はもう一人がやってくれてると思うから大丈夫だよ。」

魅斗の方が顔が広いし。もともとあいつが引き受けた依頼なんだから、それくらいはやってるだろう。やって無かったら一週間分、昼食を奢ってもらう。

「ふうん。そういうオカルトな話、本当にあるんだね」

「いや、どうか。普通は、こう言う話は嘘っぱちだよ。表に出てるような話は大抵が紛いものだ。」

「そうなの？」

「そうだよ。有名な心靈スポットとか、そんなのは大抵ね。だって、人が何人も出入りするような場所に、わざわざ彼らが住む筈がない。」

幽霊は別だけれど。基本的に妖怪たちは、社会に溶け込んで生きているか、もしくは、そこから離れているか。もちろん、今でも呪いに利用されたり、悪い物によっていく者もいるけれど。

「ねえ、不思議なんだけどさ。依喪くんって何者？ 写真に写らないって言ってたけど、もしかして本当なの？」

「ん？ ああ、本当だよ。鏡にも写らない。」

「……どうして？」

「そういうものさ。僕の場合、君が見ているだけなんだよ。存在の証拠が残らないようになってるんだ。」

太陽に焼かれない突然変種の吸血鬼。

それが僕だ。

程なくして宇都宮さんと別れ、僕は家に帰った。そのころにはすでに太陽は沈んでいた。

「ただいま。」

「おかえりなさい。」

リビングから母さんの声が聞こえた。母さんは吸血鬼じゃない。吸血鬼は基本的に子供を作る能力を持たないから、母さんが吸血鬼だと僕が生まれなかったことになる。

「晩御飯、できてるわよ。」

「うん、今行くよ。」

そう言って、二階に上がった。鞆を置いて、管狐の管を取り出す。狐は増えていた。

僕は一階に降りた。リビングから花鉦の音が聞こえる。

## 心霊写真／心写霊真 伍

### 心霊写真／心写霊真

#### 伍

日曜日。駅三つ離れた場所にある巨大な建物を前に、僕は一人で立ち尽くしていた。

でかい。

めちゃくちゃでかい。

水族館と思っていたけれど、そうではなかったらしい。美術館・水族館・植物園・博物館。さまざまな創作品が集まっている、巨大過ぎる建造物だった。

なんつーもんを作るんだ。

「よ、依喪くん！」

ビクリ、と肩が強張る。今日は沙織ちゃんが下の名前で僕を呼ぶ。特に理由は追及していない。追及したくない。下の名前で呼ばれることに全く免疫がない僕はいちいち過剰反応してしまう。あ、魅斗は別だ。

「中に入るよ？ 入場券買ったから。」

「あ、うん。じゃあ、行こうか。」

沙織ちゃんに腕を引かれた。

ゾクリ、

目眩がする。

離れる、本能が警告した。

僕はとつさに沙織ちゃんの手を振りほどく。

「きゃ！……どうしたの？」

「あ、いや。なんでもない。大丈夫？」

今のは、

何だ？

吸い取られそうな感触だった。

……いや、大丈夫。何でも無い。僕はそう思った。疲れてるだけだ。最近、血を飲んでいないから。

僕たちは建物の中に入った。

入口すぐのエリアは、案内用らしい。各階になにが展示してあるかが巨大なディスプレイや、精錬されたデザインのメッセージで示されている。

僕たちは三階の『海の恵み』エリアに行った。エレベータで登る途中、お年寄りの夫婦が入ってきた。

僕は入口近くに居たので道を空けた。

「ありがとうね。」

二人は僕にそう言った。それから、三階に着いて僕たちはエレベータを降りた。

「年をとっても仲良しって素敵だね。」

沙織ちゃんがそう言った。確かに、長い間ずっと仲良くできるといふのは、素敵だ。

それには憧れる。けれど、僕にはそういうパートナーはできないだろう。

吸血鬼は年を取らない。僕は永遠に、一六歳だ。

「ここが水族館。前の彼氏と来たところなんだよ。」

「そうだったんだ。ああ、そう言えば。写真は男の子と一緒に写ってたね。」

僕たちは床の矢印に従って歩いてゆく。薄暗い館内。壁に小さな水槽がいくつも埋め込まれている。それぞれの水槽はライトアップされていて、幻想的な雰囲気醸し出していた。

「綺麗だね。」

「でしょう？ 私、ここが凄く好きなんだ。毎週かならず来てるの。彼氏とのデートも、ここばかり。」

「へえ……。それじゃあ、写真も毎回撮ってたの？」

「そうだよ？ まあ、毎回ってほどじゃなかったんだけどね。」

そんな会話をしながら、展示されている生き物を眺めて行く。海の中にしか住めない生き物を、箱庭の中に閉じ込めて。もし海の中に人間のような知的生命体がいたなら、空気の水槽を作って人間を閉じ込めただろうか？

陸の生き物、とても銘打って。博物館を建てただろうか。

水の泡の中に居るこの生き物たちはどんな気持ちだろう？

半透明のクラゲ。様々な体色の熱帯魚。日本にしか見られない魚。イソギンチャクやエビ。無数の生命が閉じ込められていた。

いくつかの部屋を抜けて、最後に到着したのが、縦に伸びる巨大な水槽だった。沙織ちゃんから借りている写真の撮影場所。

水槽の中には鮫やウミガメなんかの巨大な生き物をはじめ、小さな生き物も数多くいた。海の一部をそのまま切り抜いてきたような水槽だった。他の小さな水槽とは違っている。

「ねえ、依喪くん。写真撮らない？」

「……いや、写真は苦手なんだよ。」

まさか、写真に写らないとは言えないし。宇都宮さんの時は、まあ、特別だ。

「えー。可愛い女の子と一緒に撮ろうって言ってるんだよ？ だめー？」

「ダメ。」

「けちー」

沙織ちゃんは頬を膨らませた。いや、そんなことされても困るんだけど。

「ま、いいや。それよりお腹すいちゃったので、レストランに行こう！」

「レストラン？ この中にあるの？」

「うん、そうですよ。一階にちゃんとある。やっぱりお腹空くからね。お土産さんなんかも、一階。」

「へえ。よくまあ、そこまで何でも揃えたね。」

「世界の名物を食べれるんだよ。おいしさよりも好奇心を満たしてくれるレストランなのです。」

なんつーコンセプトだ。そう思いながら、僕たちは再び一階に戻る。

水が多かったのに、幽霊は一匹もいなかったな。そう思いながら、僕は沙織ちゃんに案内されて、レストランに入った。

適当にメニューを決めて、それを告げる。

「えへへ。」

ウェイトレスがメニューを下げてから、沙織ちゃんがうれしそうに笑った。

「なんだかデートみたい。」

そう言えば、僕に対する言葉づかいがだいぶ変わっている。

そうか、そういう認識だったのか。

……いや、血を吸うのはやめた方が良い。どうせ吸いすぎて殺してしまうのが落ちだ。

食事を終えてから、今度は四階の植物園に行くことになった。そこは、造られた森の中を歩くようなデザインになっていた。縦横無尽にめぐる立体的な道を、植物を觀賞しながら歩く。

「ねえ、依喪くん。私しか知らない場所、教えてあげる」

「え？」

「こつち。ここから、奥に入れるの。」

沙織ちゃんはそう言って、道ではない場所に入って行った。僕はあわてて後を追う。

そこは作られた森の一角で、確かに奥が隠れていそうな場所ではあった。ちようど大きな木が邪魔で、その奥が見えない。

ここが、迷宮の入口だとも知らずに、僕はそこに入って行った。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2503f/>

---

件の九段

2010年10月9日21時14分発行